



資料館だより

NO.61
2017年
8月号

過去と未来がひびきあう
—ようこそ、エコミューズへ。
www.aozora.or.jp/shiryou/

あおぞら
財団付属
西淀川・公害と環境資料館
エコミューズ

～西淀川大気汚染公害の時代を追体験～ 新しい教材の体験会を開催しました

新教材「住民が動いたまち—大阪・西淀川の経験から考える市民力」の体験会を7月2日に大阪で、8月7日には東京で開催しました。この教材はエコミューズに所蔵されている資料やヒアリング記録を活用して開発しました。実際に大気汚染公害が激甚だった1960年頃に西淀川で暮らしていた人たちをモデルにした5つの「家族」の物語を追体験するものです。

仕事を求めて好景気な西淀川に移り住んで来た家族、町工場を営む家族、公害の影響で漁業を止めて建築業をはじめた家族、子どもが公害病になる家族、教え子が公害病になってしまふんとかしようと運動をはじめた教員の家族というふうに、5つの家族それぞれの「条件カード」を読みながら話し合いを進めます。



森脇君雄さん (大阪会場)

※地球環境基金助成事業

大阪の会場では、教材のモデルの一人である、西淀川公害反対運動のリーダーの森脇君雄さんが来てくださいました。参加者の話し合いの様子をみて森脇さんは「50年前にタイムスリップしたよう」と言われ、当時実際にあったような会話が再現されていることに感心していました。

午後からは、教材の活用方法について検討しました。この教材から自分たちの課題として学ぶ必要がある、問題解決のためには社会システムに目を向けることが必要だから短く講義が必要だろう、この教材で養いたい「市民力」についてもっと明確にする必要があるといった意見が活発に出されました。

教材モニターを引き続き募集中です。ご希望の方はぜひお問合せください。(栗本知子)

ボランティアスタッフとして同行された吉岡さんがご寄稿くださいました。

灘高等学校フィールドワークを行いました(6月23日)



神戸市の灘高等学校3年生、教員も含めて約50名のかたがたが、西淀川でフィールドワークを行いました。

43号線の湾岸線利用を呼びかける表示、騒音、住宅に隣接する工場のおい、そして、大気の測定、騒音対策、地域の緑化などが、公害患者のみなさんのたたかいによって実現したこと。これらを灘高の生徒さんたちは、自分で歩き、見えるもの、聞こえる音などから感じとってくださったことでしょう。

あおぞら財団にて、公害患者の池永末子さん、前田春彦さんのお話をうかがいました。今も省庁や企業に出向き、声を上げつづけているが、生返事しか返ってこない。将来、その「聴く側」になるかも知れない生徒さんたちには「声を聴く人になってほしい」と思いを語られました。質疑応答では、「子どもたちにご自分の体験を伝えるとき、自分たちが暮らしている街に子どもが悪いイメージをもってしまうのではないかとジレンマを感じたことはありませんか」というすどい問いも。患者さんの答えは「たしかにたくさん問題があったけれど、自分たちがたたかって、それを改善していった、よくしていったということを伝えたいと思っています」というゆるぎない思いに満ちたことばでした。



灘高生のみなさんは、五感で受けとめたことを患者さんのお話と重ねて、しっかりと考えてくれているのだと感じました。自分の感性をだいに学んでほしいと願います。

苦しむ人の声を聴ける人になりますように……。(吉岡秀紀)

■ エコミューズでは、新しくなった西淀川フィールドマップを販売しています。是非お手に取ってご覧ください。■